

調査の趣旨

今回の調査は、雪解け期におけるアンドレイ・プラトーフ(1899-1951)の死後出版以後の、この作家に対する、ロシアにおける再評価に関して行った。プラトーフは革命後、ロシアで作家として執筆を続けつつも、ソビエト政権に対する批評性を失わなかった。こうした姿勢が災いして、彼は主要な作品の多くを生前に発表することができなかった。それだけではなく、いまだに、プラトーフ作品の全集は刊行されていない。当然ながら、このことは、この作家を研究する上で、障害であると捉えられている。

それに対して本研究では、ソ連後期におけるプラトーフ作品の選択的な公開とその受容のあり方を、一つの文化現象として検討の対象とする。ペレストロイカ以前のソ連のどのような状況が、プラトーフ作品の再評価を許容し、そして必要としたのか。本研究における申請者の関心は、その点にある。

調査の日程

第1回: 平成 25 年 11 月 11 日(月)～13 日(水)

第2回: 平成 26 年 2 月 3 日(月)～6 日(木)

調査の内容

第1回の調査では、まず、プラトーフに関する最新の研究書を収集した。具体的には、英語圏の大学で書かれた博士論文、および、ロシアで刊行された研究書を複写した。

また、本館・東書庫5階・スラブ新聞のコーナーに配架されている、「文学新聞」(ソビエト作家同盟の機関誌)の現物の所在を確認した。申請者の関心は、特に、雪解け期におけるプラトーフの死後出版が最初に行われた1958年以降の、この作家に関するメディアにおける位置づけにあった。北海道大学の図書館では、上記の時期における「文学新聞」の大部分を現物で閲覧することができることを把握した。

第2回の調査では、前回の調査で、所蔵されている巻・号について詳しく把握した「文学新聞」の閲覧を、1958年～1959年の分に関して行った。その結果、アンドレイ・プラトーフについては、記事の見出しに取り上げて扱うなどの大きな扱いは本紙ではなされていないことが分かった。しかし、紙面を総当たりで閲覧するなかで雪解け期における文壇の言説について多くの知見をうることができた。特に、ソビエト文学がもつ、「世界文学」への志向を、確認することが出来た。特に興味深い記事については、日付を記録した上で複写を行った。

報告の機会

第2回の滞在の際、申請者のこれまでのプラトーフ研究について、スラブ研究センター・ユーラシア表象研究会で、発表する機会を与えられた。ロシア辺境を舞台とする短篇『砂の女教師』と中央アジアを舞台とする中篇『ジャン』の比較を行った。文学を始めとして、歴史学も含む多様な研究領域の研究者から、貴重な示唆を得ることができ、有意義であった。

付記

末筆になりましたが、このような機会をくださった北海道大学スラブ研究センターと、滞在中に施設の利用に関してご配慮頂いた事務の原田千里さんにお礼を申し上げます。